

鯉のぼり

藤原チコ

ゴールデンウィークを目前に控えた四月の終わり、もうすぐ七か月になる息子を連れて、私は家から離れた海沿いの公園にやってきた。

車で小一時間かかるそこを今日訪れたのには、訳がある。それは鯉のぼりだ。SNSで知ったのだが、今年はそので初めてとなる、鯉のぼりのイベントが行われているらしい。なんでも、たくさん鯉のぼりが空高く掲げられ、大空を舞っているというのである。

うちはアパートだから飾っていないし、そうでなくても最近あまり見かけなくなってきた。いい機会だからゆっくり堪能しようとシートまで持ってきた私は、息子以上にワクワクしているに違いなかった。

平日だからか、駐車場は意外と空いていた。肝心の息子は車の中で寝てしまい、ベビーカーに乗せ換えても起きる気配がない。

残念だと思いつつも、実はほっとしている自分がいて、私はガタガタしないよう道を選びながら、広場へと急いだ。

わあ。その光景が視界に入った途端、思わず声を出していた。

昨日降った雨が嘘のように澄みわたった青空を、数え切れないほどの鯉たちが、整然と、そしてゆうゆうと泳いでいた。太陽の光をうつつしてぬらりと輝く胴体や、海からの風を受けて身体をくねらせるさまは想像以上に生き生きしており、目が釘付けになる。その色合いも豪華で、紅白の模様、それに黒の混じったもの、あるいは金一色のものと、一匹一匹が上品で美しかった。

空には力強く泳ぐ鮮やかな鯉がいて、ふと視線を下げると、植え込みには白やピンクのつじが咲き誇っている。何て贅沢なんだろう。

思えば、産休・育休に入るまでは毎日が職場と家の往復で、自然に触れることがほとんどなかった。季節を感じる手がかりといえば、年に三度の繁忙期の訪れや、ドラマのクールが終わることぐらい。その頃はそれに慣れていただけれど、味気なかったんだなあど気付かされる。

なんだか全身に血がめぐっていくような感覚がして、私は持ってきたシートを広げるとも忘れ、長い間立ちつくしていた。

と、その時。東側に並んでいた鯉たちが、突然その隊列を乱した。

突風か。私は咄嗟にベビーカーを引き寄せ、身構える。しかし、こちらには何もやって来ない。

気のせいだったのかな。

でも、しばらくすると、鯉の列は再び乱れた。

何だろう。注目していると、鯉たちは一か所に集中し、散らばり、また集中して……という動きを繰り返しているようだ。この動き、どこかで見たことがあるような。

興味をひかれた私は、ベビーカーを押しながらその鯉たちのもとへと近付いていった。その列の鯉は身体に風を多く取り込んでいるのか、丸々と太っていて一段と元気そうに見える。そしてその下に、一人の老人が佇んでいるのが見えた。

ただの見物人かと思えばそうではなく、彼は空を見上げては、ひしゃくのような物で何かを投げている。そして、その動きに鯉たちが反応しているのである。まるで餌やりみたいに。

老人は、私に気付くところを向いた。皺の刻まれたその顔は険しく、三白眼が陽光にキラリと光る。

「何か用か」低く、大きい声だった。

「その、何をされているのかな、と」

私は反対に、ぼそぼそと風にかき消されそうな声。

「見てのとおり、餌をやっているんだ」

彼は当然のようにそう言ったが、それではさらに混乱するだけだった。

「餌って……鯉のぼりが食べるとでも？」

「やってみるか？」

彼はためらいもなく、手に持っていた道具を差し出した。

「はあ」

受け取ったそれは、柄の長いスプーンといった感じだった。何でできているのか分からないがひんやりと冷たく、彼の握っていた部分だけが温かい。老人の足元には大きな箱があり、そこにはカーキ色の餌がどっさり入っていた。それをすくって、上に投げているらしい。

フリでも何でもなく、本物の餌を本当にあげているのだ。

私は考えの整理もできぬまま、見よう見まねで投げてみた。しかしそれは鯉たちのはるか下までしか上がらず、すぐにパラパラと落ちてくる。一羽、また一羽と、どこからともなく鳩が集まってきた。

まずいと思ったのか、老人は丁寧にコツを教えてくれた。手首の使い方やリリースのタイミング、それらを意識しながら遠投を繰り返していると、ようやく鯉のいる辺りまで飛ぶようになった。

ベチッ！

私の投げた餌に気付くやいなや、鯉たちはその巨体を翻し、それに突進した。身体同士が激しくぶつかり、すさまじい音がする。

鯉たちは、ある程度の高さまで餌が届きさえすれば、たとえどんな場所に飛んだとしても絶対に食べてくれた。それはとても気持ちよく、頼もしかった。息子の離乳食があまり

うまくいっていないので、余計そう感じるのかもしれない。

私は時折その迫力に気圧されながらも、夢中になって餌を投げた。

「助かるよ。昔はこのくらい何ともなかったんだが、歳を取るとこたえてな」

老人はいつの間にか、小さな椅子にちょこんと座っている。改めて見ると、かなりの歳のようだった。

一体いつから? どうやって? そして何のために? 何から聞けばよいのか分からない。

ただ、もうこの鯉たちが生きていることに、疑問はなかった。彼らは鯉のぼりではなく本物の鯉、それも錦鯉なのだと、理屈ではなく感覚が受け入れていた。

「立派な鯉ですね」

そう言うと、老人は満足そうに何度も頷いた。そして、静かに語り始めた。

「わしの子どもの頃は、貧しくてな。――まあ、時代よ。戦争で何もかも焼けてしまったし、物資も不足しとったからな。年月が経って周りが豊かになっていく中でも、うちは苦しいままだった。親父は懸命に働いていたんじやが、何をしてもあんまりうまくいかなかったみたいでな。『はたらけどはたらけどなおわがくらし楽にならざり』じゃ。それでも、なんとかわしら兄弟を育ててくれた。わしは、五人兄弟の末っ子よ」

餌をやる手を止めると、鯉は元のように整然と泳ぎ始めた。

「そんなある時、わしが十歳ぐらいの頃かなあ。それがどこか思い出せんのだが、家族で公園に行ったんよ。そこには大きな池があつてな、丸々と太った錦鯉がたくさん泳いでた。わしは初めて見る美しい鯉に夢中になった。そこには餌も売っていてな、わしも一袋買ってもらって、兄たちと一緒にあげたんよ。親父は、少し離れた所でその様子を見よった。

だが、わしらが餌をあげ終わっても、飽きて帰りたくなっても、親父は池をじいっと見たまま動かん。わしはなんだか少し心配になってな、親父のもとに駆けて行った。すると、親父は池の方を見たまま言ったんよ。『一度でいいから、こうやってのんびり鯉に餌をやりながら、気ままに暮らしてみたいなあ』って。

それは、わしが聞いた初めてのの本心だった。いつも働きづめで、それでも豊かにならんかったが、親父の口からは文句も弱音も出たことがなかった。そんなことを望んどったのか。わしは、親父の気持ちを知れてうれしかった。しかも、わしにだけ打ち明けてくれたんだと得意になった。だから、『僕が家に池をつくってあげる、鯉も入れてあげる』と約束したんじや。でも結局、そんな暮らしをさせてあげることなんてできるはずもなく、親父もおふくろも、とうの昔に亡くなってしまった」

老人は空を見上げ、それきり口をつぐんだ。

「もしかして……だから鯉を?」

彼は約束を果たそうとしているのだろうか。天国にいてであろう、ご両親との。

「上から見たら、きっと池みたいに見えるじやる。ただ、どの辺に住んどるか分からんから、毎年場所を変えながら、全国を巡りよるんよ」

少しはにかむように口の端を歪めて、彼はそう答えた。

その時だ。頭上の鯉たちが、再び隊列を乱したのは。今回は誰も餌をやっていないにもかかわらず。

私たちは、思わず顔を見合わせた。

降り始めの雨粒が急激に増えていくように、鯉の乱れは瞬く間にあちこちで起こり始めた。これはもう、気のせいではなかった。老人は目を見開き、声にならない声を上げている。

やっと、見つかったんだ。

私はそっと踵を返し、その場を離れた。急に動いたためか、息子がようやく目を覚ます。

「また、来年も来ようね」

よく眠れたからか、彼は機嫌よく脚をばたつかせた。